

NIMIT PHUMITAWON
ニミット・プーミターウォン

農村開発顛末記

—タイ国農民小説選(2)—

野中耕一 編訳

タイ叢書 文学編 25



井村文化事業社 発行
勁草書房 発売

ニミット・プーミターウォン

農村開発顛末記

ータイ国農民小説選(2)ー

野中耕一編訳

井村文化事業社

訳者紹介

野中耕一（のなか・こういち）

1934年3月31日生れ。

1961年3月 東京大学農学部農業経済学科卒業。

1961年4月 アジア経済研究所入所。

1965年-67年 タイ国カセサート大学留学。

1977年-79年3月 アジア経済研究所海外調査員として、バン
コク駐在。

1979年5-11月及1980年3-9月 国際協力事業団専門家
として、タイのトゥモロコシ開発計画に参加。

現在 アジア経済研究所統計部部長

訳書 ニミット・プーミターウォン；“ソーイ・トーン”
シーファ；“生みすてられた子供たち(上)(下)”

農村開発顛末記—タイ国農民小説選(2)—

＜タイ叢書文学編25＞

1983年8月10日 第1刷印刷

1983年8月20日 第1刷発行 定価 1,550円

著 者 ニミット・プーミターウォン

訳 者 野 中 耕 一 ©

発行所 株式
会社 井村文化事業社

東京都渋谷区道玄坂2-16-3

発売所 株式
会社 勁 草 書 房

東京都文京区後楽2-23-15

振替 東京 5-175253

落丁・乱丁本はおとりかえます

製版／清水印刷 印刷／港北出版印刷 製本／谷島製本

0397-989402-1836

目次

タイ農民の四季	1
農村開発顛末記	75
短編小説集	197
田舎の先生の幸福	198
自分で作った先生	205
今日は、ドゥア先生	211
教師三国志	217
酒のみの仁義	224
ドート先生の備忘録	231
一バーツ貨	236
先生が欲しない子供	243
最後の鞭	249
解 説	255

タイ農民の四季

1 農家の家族

「着きましたで！」

牛車を馱していた男が、手綱を引き締めて牛を停めながら大声で言った。

私は牛車から飛び降りて、サン・グラスを外した。ノーン・ルアン(1)の平野が一望千里の内にばっと、目に明るく映った。私は見渡す限り地平線まで広がる田圃の真中に立っていた。四方に見えるのは将棋盤と同じように四角に区切った畔だけである。茶色に枯れ上がった藁がガサガサと揺れながら黴臭い臭いを放っている。タバーク(オオバナ・サルスベリ)の木やグラトウム(シマシラキ)の木が遠くに入り混じって立っている。海のような田圃の広さのせいで、砂糖椰子の木は低く小さくなって見える。ノーン・ルアンの沼は広いが浅い。水は干上がって、わずかに水牛が身を横たえるだけのドロドロと濁った水溜まりが中央に残っているだけであった。枯れたサノー(ツノクサネムに似た)の木が沼の周りに叢を作っている。私の立っている所に、崩れ落ちそうな小屋が二棟立っていた。

広大な田圃が私の身体を指程の大きさに縮めてしまった。心臓も小さく縮まってしまい、たった一人にいるような気持ちになる。鳥も一羽として見当たらない。風がさあーと吹き抜け去っていった。

ナーイ・スックは軛から牛を離してやった。十歳の息子が素っ裸で、飛び跳ねながら走り寄って来た。父親から牛の手綱を受け取ると、引っぱって行って繋ぎ、乾いた藁を与える。ナーイ・スックが軛を地面に下ろすと、牛車の後部はびんと跳ね上がった空に向いた。彼はそれによじ登って私のカバンと本の箱を下ろしてくれた。私は彼に二十パーッ差し出した。

「要らないですよ」

彼はスコタイ県(2)の訛で断った。

私は手の中に押し込めようとしたが、彼は手を開こうとしない。彼の破れた上衣にも、ポケットはついていない。

「大したことじゃないです、先生」

彼は囁れた声で言い張る。顔には不満そうな色が現われている。

これが、ノーン・ルアン村の貧しい農夫なのだ。

「どこかな？ 学校は」

私は学校のある場所を聞いた。

「あっちですよ」

彼は田圃の中の茅葺きの建物を指差した。これまで過した経験があるので、別に変だとも思わない。この農家やあつちの農家の小屋のすべてが、肩をすばめるように寂しげに建っているというのに、校長先生一人だけの学校がどれだけ豪華になれるというものか。

ノーン・ルアン村は、水田作りの農民だけの村で、農家は自分たちの田圃の中に散在していた。乾季は水牛の通る道を使い、雨季には畔道を歩く。ナイ・スックが小屋へ上がるよう勧めた。階段の最後の段を踏んで床の上へ上がると、竹の床がぎしぎしと音を上げて、折れるのではないかと心配になった。こちらを踏むとあちらが上がる。床の割れ目から床下まで見通せる。壁の南側は砂糖椰子の葉で葺かれて、雨水の降り込むのを防いでいる。寝具は一隅に押し込められ、天井には蜘蛛の巣がほをつけて、黒いカーテンを作っている。屋根材の竹は煙で燻されて真黄色になっている。台所のある片隅は、他の隅よりも黒くなっている。かまどは竹と土とで出来ている。竹を縦に四つに割り、先を雄と雌とに細工して、四方形に組み合わせて床の上に置き、土を入れて固め三脚架として真中に石を三つ置いてある。薪の媒で台所用品は全部真黒である。寝所を見ると、もし、もう一人子供が増えれば、彼が小屋の壁から突き出てしまう程の狭さだ。私がここに泊めて貰うことは、きつと無理だろ

う。でも学校にだって壁はない。

スックは牛車から物を運ぶのに降りて行った。彼は米を町に売りに行き、帰路は、甘蔗水や植物油、その他雜貨を買って来て、田植え時のための準備をしているのだ。

「先生にご飯を炊いて食べて貰えよ、ピム」
彼はかみさんにこう言った。

ピムは台所へ入って木切れを裂き、三脚台の間に積み上げて、その上に薪を三、四本置いた。火を着けるとぱっと燃え上がり煙が広がる。ラカム(トゲサラカ)の木の燃える匂いに、壺の中の生の魚醬と塩漬けの魚の臭いが入り混じっている。ピムは鍋の底の冷たいご飯を取ってお碗に移し、鍋の内側を洗った。それから、椰子殻で米を掬って入れ、一回だけ研いで三脚台の上に置く。鍋が火の中に消えてしまいう程火が燃え上がって鍋を包んだ。

ピムは大柄な女で頑丈そうだった。肌は真黒で黒光りしている。部厚い胸に太い腕をしており、まるで工場のように子供を生産する役目を果たしてきた。一番上の子が十歳になったばかりなのに、弟や妹が七人もいる。この次の乾季には、また、一人増えそうだ。子供が沢山いることは、田の仕事をやることにそれ程障害にならない。彼女は妊娠してから出産の直前まで、あらゆる仕事をして、休む日はない。彼女は田の仕事にとって大切な労働力である。もし、

スックにかみさんが欠けたなら、片手になったも同然なのだ。

スックはトーンを呼んで私を紹介した。彼は世帯を別にして、一人で小屋を建てて住んでいた。トーンは三十五歳の独り者である。

「こちらは、チャイ先生、新しく来られた先生だ」

スックが弟に言った。

私はトーンに向かって笑顔を作った。彼は仏像と同じような真面目な顔つきだったが、私に対して、口の端と目を少しばかり綻ばせた。

「先生を泊めてあげてくれ、ここは狭過ぎるから」

スックが弟に言った。寝る所については、ホットした。

彼は鶏を絞め、手早く羽をむしった。熱湯につけて時間を無駄にすることもない。鶏は瞬間に産毛だけになってしまった。かまどの前で焙^ほつて毛を焼き、鶏の皮が全体がびんと張って真黄色になると、兄嫁に渡して夕食のおかずを作って貰う。

ゲーン(タイ・カレー)(3)がお客をもてなしたり、お坊さんに献上したりする時の、農民の最上の料理である。ピムは竹の子の漬物を入れた鶏のゲーンを腕を振るって作った。炒める植物油とナム・ブリック(4)の匂いが小屋の中に立ち籠めると、くしゃみの音が響き、涎が流れ出る程

空腹を誘う。ピムはゲーンを掬って金物の鉢に注いだ。鉢のくすんだ白さの上に黒く剝げ落ちた跡がある。外側には、茶色の垢がべっとりとかびいついて模様を作っている。私も同じようにそんな汚さは嫌だった。町の生活が、食卓の上の清潔さと美しさを愛するように私に教えていたからだ。華麗な模様の食器の他に、食卓は、花瓶の花で飾られていた。だが、このノーン・ルアンは農民の家庭である。水汲み容器の中の水を見ただけで、諦めてしまった。その濁った水は、沼の底から汲んで来たもので、飲み、ご飯を炊き、茶碗、鉢などすべてを洗うのである。これらの茶碗、鉢がどうしてびかびか光ることが出来ようか。鍋の中で湯気を立てているご飯だって、御覧よ、土を入れて炊いたように薄茶色になっているではないか。

私はスックとトーンと車座になって食事をした。鉢にご飯をよそい、手掴みで食べ、胡座をかいて坐る。スックとトーンはご飯の鉢を左手で持ち、右手でご飯を掴んで食べた。まるでカボック(パンヤ)繊維を詰め込むように口の中に放り込む。私も美味いと思った。美味さは、茶碗や鉢の色にあるのではなく、味付けと空腹とを合わせたものにあることが分かった。

台所の隅の方へ目をやると、母親と子供を合わせて九人が一緒に車座になって食事をしている。子供たちは全員が

何も着ないで、膝の前に一人ずつ鉢を持っている。母親が全員にご飯をよそってやる。皆にいきわたる前に、鍋の中のご飯はべこんと半分減ってしまった。子供たちは、ゲーンをご飯の上に少しかけて、ご飯を三口分も手で掴む。農民は子供たちに、「ご飯を沢山食べて、おかずは少し食べろ」と教える。それに、子供たちは辛いゲーンを私よりも、平気で食べている。静かにして食べて、お喋りもしない。ゲーンを掬うスプーンの音とご飯を噛む音がするだけである。

私はおかずを沢山食べるのが習慣になっていたもので、お碗の中のご飯が半分以上なくなつてから、私一人でスツクとトーンを合わせたよりも多く食べたことに気がついていた。中華鍋の方を振り向いて見ると、それはもうなくなっている。子供たちの鉢の中も汁が残っているだけである。

私はゲーンの汁を掬って、最後に残っていた一口分のご飯の上にかけた。腹がばんばんに脹るまで何かを胃の中に詰め込んだようだった。

「先生ちょっとしか食わないな、田舎のゲーンだし」スツクは私が手を洗うのを見ながら、杓子に残っているご飯をついだ。

私は、「田舎のゲーンだし」という言葉が良く分かった。スツクはゲーン汁が彼のかみさんの腕で、町から来た若い

先生の口に合わないと思ったのだろう、不満そうな口調だった。彼には私の気持ちは分かって貰えないのだ。彼がお客のもてなしが不十分だと思っている時、私はスツクのかみさんと八人の子、それに、一桶(タン) (5)、五バーツ(一バーツは約十一円)もする白米の値段を思い浮かべていたのである。

トーンが鞆を彼の小屋に運んで行ってくれた。小さな小屋で一メートル程の高さだった。三段程の梯子が、竹をそのまま張った濡れ縁に立て掛けられていた。寢室は二人がやっと寝ることのできる広さである。私ははっとした。この二人がいるだけなら快適だ。トーンはゴザを二枚持っていた。彼は新しいゴザを持って来てそれぞれ別の壁にくっつけて敷き、二枚のゴザの間を離れた。私はゴザの上にもう一枚布を重ねて敷いた。蚊帳はまだ必要ない。乾季の田圃には、蚊はいないのだ。

日が暮れ、宵の明星が砂糖椰子の木の上に浮かんだ。弱い風が田圃の端からそよそよと吹いて来る。フクロウが二、三羽、啼き声を上げながら屋根の上を通り過ぎた。コオロギが沼の縁から軽やかな歌を歌う。時折、犬の遠吠えが聞こえる。トーンは缶詰の缶製ランプの火をつけた。そのゆらゆらとする黄色い明かりから煙が立つ。暗い部屋の中で本を読むのと同じように息苦しさを感じさせる明かり

だった。

トーンは銃を取って枕元に置いた。それは銃身が真鍮製で、弾を先から込める元込め銃だった。それから、引き金の下に色々の部品がぶら下げてある。弾入れ小箱、雑布、弾込め棒、槩杖^{きしやう}などである。私はそれが刀よりも優れている武器かどうか自信がなかった。

私たちは横になってあれやこれやと生活や状況のことを話し合った。彼はお喋りではなかったが、ノーン・ルアンの平野について私に色々教えてくれた。こんな遠く離れた平野の真中にいれば、何事につけても自らを助けなければならぬ。銃は、牛や水牛を守り、安心させてくれる。乾季は、交通は便利だが、泥棒も国境を越えて入って来る。ぼんやりして盗まれてしまえば、請戻し料を支払わなければならない。

トーンの水牛小屋は、枕元に接していた。アイ・トゥイ⁽⁶⁾が木製の首の鈴をカタコトと鳴らしている。鈴の音は、ちゃんといふことを飼主^{かひぬし}に教えてくれるのだ。ノーン・ルアンの平野には、阿片常習者が何人もいる。この連中は怠け者で、田の仕事をやる力がなく、いつも人の物を取ろうとして、やくざ者を連れて来ては人を悩ます。村長（プーヤイ・バーン）もまだいない。何キロも離れたところにいる区長（ガムナン）⁽⁷⁾に頼らなければならない。

スツクの小屋の上の子供たちの声も静まってもうずい分と時間がたった。農民たちはいつも日が暮れると寝るのである。

向こうの村の方から空がごろごろ鳴る音が聞こえて来た。トーンは雨について愚痴を言った。乾季には飢えなければならぬ。見渡す限りの田圃には枯れた葉があるだけで、野菜も魚も探し出して食べるのは難しい。何か月もの間、冬瓜と南瓜と竹の子の漬け物に頼らなければならぬ。もし、雨が来れば、朝顔菜、サノオの花、チドメ草もあって、摘んで食べることも出来る。それに、一番大事なのは、田の仕事を始められることだ。

横になって話しているうちに、どちらが先に寝入ったのか気がつかなかった。私は鉄砲の音に驚いて、目を覚ました。犬が床下で激しく鳴いている。起き上がって坐ろうと身体を動かすと、こつこつした手にぎゅっと押えつけられた。「起きるな！」

トーンの囁き声であった。

トーンは伏せて新しい弾を込めた。スツクの小屋の方から銃声^{てうせい}が上がり、沼の縁の方からも続けて一発銃声^{てうせい}がした。弾が小屋の上にコトリと落ちて来た。手を出して探ると、ゴザの上に小さな丸い鉛の弾があった。トーンは筒先を壁の割れ目に突っ込み、目は水牛小屋の中の目標を探し

ている。

「泥棒が水牛を盗りに入った」と彼が囁いた。

私の心臓は芝居（リケー）（8）の太鼓のように、ドキドキと高鳴った。でも、小説とは違う現実の人生においては、決して、うきうきとした楽しいことではない。

犬の鳴き声も静まった。スックが心配して小屋から降り、私たちを訪れて来た、

「もう、行っちゃった」

スックが弟に言った。

その夜は、夜が明けるまで、私たちは床下で夜警をしなければならなかった。

2 大地の水蒸気

トーンは朝暗いうちから起きて、西の平野の外れの森へ牛車を駆って行った。何キロもの遠方で、そこには鬱蒼とした竹藪があった。彼は竹を取って来て、垣根を作ってこれまでよりもがっしりとした水牛小屋を作りたいのである。昨夜の事件が警戒しろと教えていた。泥棒たちが跳梁し始めている。

スックは村へ行って、決まり通り区長（ガムナン）さんに報告した。昨夜、彼は犬の声を頼りに銃を発砲した。泥棒に当たったかも知れない。沼の端に二、三滴の血痕があった。もし、奴が彼の考えた通り怪我をしたとすれば、恨みを懷き、田の仕事の始まる前に、借りを返す機会を狙うことは間違いないだろう。

私は何もすることがなかった。学校はまだ始まっていない。小屋を降りてその辺りをぶらぶらと歩いた。早朝の田圃の空気は澄んでいて、まるで呼吸を助けてくれる器具がついているかのように呼吸が楽であった。

スックのかみさんのピムは、台所仕事と子供の世話で忙

しい。私たちの今朝の食事は、ご飯にナム・ブリックと南瓜の煮付けである。ピムは鉢にご飯をよそい、子供たちに一つずつ渡し、親指より少し大きい真黄色の南瓜の煮付けを一切れずつ配った。子供たちはご飯と南瓜とナム・ブリックを、卵を入れたご飯のように真黄色にして、指先きで混ぜ合わせて、手でつまんでおいしそうに食べ、綺麗に平らげる。全く、育てやすい子供たちだ。

南瓜と冬瓜はずっと以前に収穫していた。前年の雨季の初めに植え、良く熟れるまで放置しておく皮が堅くなる。収穫して、食いのない時に食べる。ノーン・ルアン平野は、この時期、食いの物がなく、買い求めるところもない。南瓜も冬瓜も、小屋の床下に、まだ山のように積み上げてあった。

一番上の十才の男の子のサーウは、何も言わなくても、水牛小屋から水牛を引き出す。彼らは、牛と水牛とを一番ずつ飼っている。牛と水牛は、それぞれ一長一短がある。水牛は水や雨に強く、泥んこの中を歩いて耕すのに、牛より優れている。だが、牛は日差しに強い。牛車を引張るのも水牛より良い。サーウは沼から一度に石油缶に半分ほど水を入れ担いで来て水牛に飲ます。彼の身体は、その担ぐ缶に較べて小さ過ぎる。缶が地面を引き摺らないように紐を短くしなければならぬ。田圃の生活は、サーウに子供の時か

ら仕事に対して頑丈になり重い仕事を引き受ける準備をするように鍛えていた。大きくなれば、彼の希望は、鋤の柄にあって、万年筆や椅子にはない。本は、日常の生活ではほとんど役に立たない。サーウは素っ裸で、黒光りをする肌を見せていた。彼は、私の方を恐る恐ると盗み見ては、その正直そうな顔をいつも伏せていた。

朝遅くなって、ピムは家の上の仕事を終え、小さな子を腰に抱いて床下に降りて来た。それから、子供を土や埃と遊ぶままにさせて小屋の側の小さな米倉から籠で粃を掬い出して搗くのである。

そこには精米所はなかった。各家庭は自分で米を搗いて食べる。米搗きの臼は花梨木の大きな木で出来ており、指先から肘までの長さより高い。ほぼ指先から肘までの深さに、円錐状に深く削り込んである。臼の中に半分ほど粃を入れてピムは堅杵で搗き始めた。堅杵はトウガラシを搗く杵を柄のところを二つ合わせた形をしている。でも、それよりはずっと大きくほぼ両手を広げた長さである。真中は細くなって握りがある。そこは、しょっちゅう手で握っているの、つるつると光っている。堅杵は搗き易い。簡単にはこぼれないが力がいって疲れ易い。粃が碎け始めると細かい粉が臼の縁に舞い上がってきた。ピムは横杵に変えた。横杵はデューンの木(南洋材の一種)で出来ていて、

釘を打つ金槌に似ているが脛の大きさほどある。握るのに適した一メートルほどの柄がついている。長い柄のために、随分と力は楽になるが、搗くのが難しく、熟練していない者がやると、米がこぼれる。私もやってみたことがあるが、毎回、臼の中の半分以上がこぼれてしまった。しかし、農民は、誰もがとてもうまい。時には、一つの臼を三人、四人でも搗く。臼の周りを取り囲み、杵を斜めに調子を合わせて交互に打ち下ろし、とても面白い。全員が自分の調子に注意しなければならぬ、ぼんやりする者は、杵が競って臼の底を打ってしまう。私は長い間一生懸命に練習したが、うまくいかなかった。私が相手を打たなければ、相手が私のを打って、杵の柄が毎回折れそうになるのである。

ピムは巧みに臼の真中に杵を打ち下ろした。大きな音が田圃に響き渡ったり、粃殻と糠の細かい粉が上に舞い上がった。二番目の子の娘が側にいて臼の縁に溢れ出る米をたえず手で払って臼の中へ戻している。彼女たちは調子を取りながら搗いた。トン、トンという大きな音がいつまでもいつまでも続く。ピムの腕と胸の筋肉が、上げ下げして打ち下ろす杵と調子を合わせてゆれ動く。汗が全身に吹き出した。農家の娘が太い腕と厚い胸をしているのを見ても全然変だとは思わない。それは、田圃が彼女たちに与えた、辛苦と美を物語る王冠である。米が搗けると箕みに掬くって入

れ、簾しだって粃殻を飛ばす。薄茶色の米が出来て、炊き上げると甘い良い香りがし、ビタミンも豊富である。

午後、スックが帰って来た。心配そうな面持で、前日のような明るさがない。大きな村で聞いた話で気が重くなっているのである。他の村から来た悪党たちが入って来て村人を苦しめているというのだ。奴らは昨夜、スックの家で失敗して南の田圃のティトティト・ペーの水牛を二頭盗んだという。乾季が過ぎるまで、この大地は焼けつく暑さのような不安があるだろう。彼は、私が同居して、ほっとしていると言った。少なくとも、男手が一人ふえた。こんな時期には、友達や仲間が一番大切なのだ。トーンが竹を牛車いっぱいに積んで来た。森の長い竹で、手を広げて拇指と人指し指の間の長さの間隔の節毎に枝がくっついている。スックは弟を手伝って牛車から竹を下ろした。サーウが走って行き牛の手綱を引いて水を飲ませに行った。ピムは大きな水汲み容器に水を掬い、トーンに飲ませた。彼らは手際良く助け合って仕事をした。竹の根元の部分をはば両手を広げた長さに切り、小屋の周辺の垣根の柱として土に埋めた。先の部分は柱の節の上に乗せて、竹を薄く切った紐で結んで、垣根の棧かきにする。四段にまで組み上げると、丁度、首の高さになった。竹の節についている枝と棘が、鋭い口となつて組み合わさっている。サーウ坊のような小さな子

供でさえ、くぐり抜けて入るのは難しい。水牛小屋へ近づくと前に、もう一つその外側に囲らせた防御柵となつた。竹の垣を作るのは難しいことではない。私も手伝つた。トーンはしなくいいと断つたが、知らぬ顔をして見ているわけにはいかない。竹を削つて作つた紐（トーク）を無器用に結ぶのだった。

トーンは頑強な筋肉をしている。彼の逞しい腕は大きな鋭い刃をした山刀を握り、腕程の太さの竹も、二度ほど刀を振るうだけで真二つに割つてしまふ。彼は巧みに刀を使った。山刀は農民にとって、最も必要なもので、何にでも使える。まるで、自分の身体の一部でもあるかのように、いつも腰に差し置いていた。男の連中は人と会う毎に、自分の山刀を自慢し合つた。刃が鋭い上に、美しくなくてはならない。刃先が鋭く曲がつて、柄のところは細く締つてゐる。柄と鞘については特にうるさい。銀やアルミニウムが嵌め込んであるのも豪華だ。取り換へてくさすることも度々ある。氣に入つて、水牛と刀を交換する者さえいた。夕方までかかつて仕事が終わる。二軒の小さな小屋は、周辺をみっちり竹の垣根が囲んだ。ほつとした。これで少しは安全だ。

今夜は暑い。南の方で、空がゴロゴロと鳴り稲光りがしてゐた。沼の縁で蛙がゲロゲロと鳴いてゐる。今夜はト

ーンは何も喋りたくないようだった。口の周りに笑みを見せるだけで私の方をちらちらと見る。ランプの火を消して寝る前に、彼は銃を抱いて寝た。前夜のように枕元に置こつたとはしなかった。翌日の午後は、まるで五尋の穴の中に入つたかのように蒸し暑かつた。西南の空が練瓦色に赤く色づいてゐる。真黒な厚い雲が目を遮り、日蔭を作つた。トーンは、時間前に大急ぎで水牛を引いて牛舎に入れた。顔色が晴れやかになり、口笛も軽ろやかにビルマの斧振り歌（10）を吹きながら小屋へ上がった。仕事着の半ズボンを水浴用布に変へ、毛布や枕や彼の衣服も私のもトタンの缶へ入れ、濡れ縁に出て立ち空を眺めた。それから、水浴用布の端をはしよつて、後ろの腰のところへ挟んだ。

「来たぞ！ 来たぞ！ ビム姉さん」

彼は兄嫁に大声で怒鳴つた。

「誰が来たの？ トーン」

ビムがトーンに笑顔を作つた。

「雨だよ。物をちゃんと片づけとけよ。風も強くなる。空が真赤なのが見える？」

彼は空を指差した。

彼はこれまで何度となく教訓を得てゐた。六月（11）のこんな空と空は、最初の雨が来る前にまず風が出る。

「雨と風と両方だぞ、おーい、トーン」

スツクが弟に怒鳴った。

ビムは子供たちを急かせて手伝わせ衣類が濡れないように箱に入れさせた。というのは竹を割って張った、小屋の壁は雨水が降り込むのを防がないからである。ビムは台所用品も片づけた。飯鍋、ゲーン鍋は竹籠の中へ入れて小屋の柱に結びつけた。風が吹いてきて、四方へ吹き飛ばすのを心配したのだ。

真赤な空が灰色から黒い色に変わり、田圃のあちこちに真黒い陰を落とした。茶色の砂塵が固まりとなって先駆けした。枯れ葉、藁くずが舞う。枯れた砂糖椰子の葉が抜け落ち、小屋の屋根を越えて飛んで行った。グラトゥム（シマシラキ）の枝がボキボキと折れる。遠くから轟々という音が聞こえ、程なく、突風がびゅうっと次から次へと吹いてきた。まるで誰かが握って投げつけたかのようであった。びゅうっびゅうっという唸りが小屋の中を駆け抜ける。雷鳴が大地を揺るがす程鳴り響き、小屋は揺り籠のように揺れた。屋根用に縫い合わせて置かれた茅が逆立ち、あいた穴に風が吹き込む。しっかりしていない茅の縫い合わせや、竹を削って作った紐が朽ちていたものは、風に吹き飛ばされて外れ、遙か彼方へと舞って行った。

トーンが私に小屋の外へ下りて行こうと誘った。こんなに風が強い時は、農民は、ぐらぐらする小屋の上は安全

でないことを良く知っていた。彼は私を連れて降り大地に避難した。その小屋の上には心配するものは何もない。せいでい屋根が飛ばされるぐらいのことである。竹壁はこれににくい。風が吹き抜ける穴が沢山あいている。大事な資産、寝具、台所用品は缶の中に仕舞い込んであり、心配はない。風の後を追いかけるようにして、雨粒がやって来た。横殴りに降りつける。拇指ほどの大粒の雨がポツリ、ポツリと降り始め、やがて篠をつく雨脚となった。空が裂けるかと思われるほど激しくなり。田圃は四方が灰色になる。空には閃光が金色の糸を引いてあちこちと走り、この十年間誰かに怒り続けてきたかのように、空がゴロゴロと鳴った。稲妻が雲の間を走って、砂糖椰子の木の上へ落雷し、赤い火柱が立った。私は雨など恐がったことはない。でも、今度だけはつい震えがこずにはいられなかった。このように雷鳴が荒れ狂う時、広野の中にと、つい背筋がぞくぞくしてくる。

雨が激しくなると、風は穏やかになってきた。田圃は水で濡れ、土が水をいっぱいに染むと、田圃一面に水が張った。高くて傾斜しているところでは、流れ落ちて、沼と水路に集まる。畔道で仕切られているところは、水位が上がり、藁が浮かんた。アイ・トゥイは、牛舎の中で跳ねて、グア・グアと啼いている。水牛は雨も水も恐れない。冷たい

柔らかな泥んこの中にごろごろと寝ころがっている時が一番幸せなのだ。沼と水路にいる魚は流れに逆らって泳ぎ田圃に出てくる。広々とした田圃が楽しいのだ。水のあるところ、すべてに魚がいる。

私は手が白くふやけるまで雨に打たれていた。寒さでガタガタと震えがくるが、トーンは少しも寒がらない。彼の皮膚は、暑さにも寒さにも強い人工皮革のようであった。自然が、彼の身体を長い間にわたって訓練し、改良してきた。一年のうちで、彼は上衣を着てるよりも裸でいる時間の方が多し。皮膚の下脂肪が温かさを保持してくれる。

トーンは、涼しさを感じるだけである。小さな子供たちでさえ、楽しそうに雨水とたわむれて走り回っている。彼らは、田圃の中の朝顔菜や魚と同じように雨が好きなのだ。大地から立ち昇る水蒸気、雨の匂いは、農民の鼻にとって、特別の香水なのだ。私はサーウ坊のような小ちゃな子供たちよりもはるかに身体が弱く、急いで小屋に上がって身体を拭き、服を着換えた。おまけに、頭がズキズキと痛むので、風邪による発熱を防ぐため、アスピリンを二錠飲まなければならなかった。

雨は小降りになった。スックとトーンは、それぞれ鍬を一つずつ担いで田圃へ出かけた。土を掘って切れた畔道を塞ぎ、水が流れ出すのを防ぐ。出来るだけ沢山の水を田圃

に溜めておかねばならない。一滴の水といえども価値があり、意味がある。沢山溜めることの出来る者が、利益を上げる。それは、収穫時に金に変わる。彼らは畔を抜けて、ノーン・ルアン沼へ流れ出て行く水を、金が財布から流れ出て行くのを見るかのように眺めた。彼らは疲れも知らぬげに土の上へ鍬を振った。土を起こして塞ぎ、水を仕切り、固く踏み固める。トーンは水を封じ終わった。たえず力を出して鍬を振ったので、冷たい雨の中でも、身体がボカボカと温かくなる。

私は、雨が降ると、交通が不便になり、道が滑り、靴が泥だらけになるので、雨が嫌いだ。でも、今日のスックとトーンの姿を見ると、もう、雨は嫌ではなくなった。

夜になると、静かだった田圃は賑やかな祭りのように騒がしくなった。乾季の間中、穴の中で冬眠し面白くなかった蛙たちが、雨に会い水を得て、穴から出て、田圃いっぱいに相手を求めて鳴くのだ。蛙やその他何千という虫の音と混じり合って、耳に心地よい音楽である。農民たちは、この音楽を何カ月となく待っていた。天使が番組を演出した最高の音楽であった。私の耳には味気ない寂しい音楽かも知れないが、スックや、トーンのような農民にとって、は、厭きることのない不滅の音楽であった。何故なら、それは、耕起、まぐわかけ、直播、田植えなど、農民全員に

生活の幕を開けろと催促する序曲だったからである。

汗の塩辛さの中で、田圃の娯楽、普通ではないごく普通の生活の物語が、今始まろうとしていた。

3 泥の匂い

雨脚は田圃の血管である。血管が枯れば、田圃は死ぬ、大昔から現在に至るまで、この状況に変わりはない。永遠に変わらない。初めての雨が訪れると、すべてのものが笑う。枯れた蔓の朝顔菜は、瑞々しい赤い芽を突き出し始める。若草は新鮮な緑の芽を魔法のような早さですくすくと出す。カニはぞろぞろと穴から出て卵を生む。蛙が相手を求めて跳び跳ねる。すべての物にとって楽しい季節である。土からの水蒸気、水の香りがあたり一面に立ち籠める。アイ・トワイ、アイ・トーンが跳ねて、白蟻の塔、グラトゥム（シマシラキ）の木を角でつつく。若い水牛は頭を擡げて雌の方を見詰め、イーブ・ワックもグア・グアと啼いて雄の方を盗み見る。

農民の生活に活気が漲り始めた。男は犁や馬鋤を担ぎ、女は蒔く種籾を調べた。彼らの仕事は始まった。事務官のように机の引き出しの中に放り込んだままにしておく仕事のようなわけにはいかない。お天気と競争して大急ぎでやらなければならないのだ。雨水が土にしみ込み、毎秒毎に